120　第三回東京法学院討論会雑観

〔『法学新報』第一〇七号　明治三十三年二月二十日〕

○討論会雑観

梅見を約したる十八日の日曜日は夜来雨に雪まじり恰も法学院討論会のある日なれば外套引被り傘片手に煉瓦作りの門に向ひぬ

思へば先月の二十一日此の会の慥か第二回なりし紛々たる大雪而して今復た雨の中雪を交ゆ嗚呼此の会何ぞ雪と緑の相深きや別号雪の会と云ふも亦太甚だ妙ならん呵々

元来会の委員とか幹事とか云ふ奴は何れも皆な一種の野心家なり彼の輩蓋し会をガラスにして其先きに在る何かを目あてにし居る者とす宜べかな彼輩のすること為すこと一も図に合はざるや

特に大塚某と云へるスレツカラシが討論会を我者の如くに何でも角でも出シヤバリて公衆の意見を打消し且つは幹事等の頭をも圧するの状あるは宛然今期議会に星亨が片岡議長を腮で指揮する如き感なからずやは

中西某とか云ふ討論者私しは諸君か手を叩くことが第一シヤクにサワルとて大立腹彼れ蓋し熱心なる議場の整理者貴族院の三浦安に似たり唯だ彼れ当日酩酊の余思ふこと言ふ所と齟齬し始め大江山の酒顚童子の如き顔色は惣ちにして土色となり選挙法案の議題の時酔ひどれて島田沼南を罵詈したる龍野周一郎其人かと疑はれたり

問題と共に記名せられたる森川と山本、片や二年級の一番、片や三年級の一番好取組と謂ふことを得可し森川先生惜いかな当日の不出来余り調べ過ぎて食消し余り考え過ぎて頭痛がしたるにあらざる耶果然彼れが顔の色の常よりは一きわ青ざめて眼立ちけるさばれ山本の興味索然たる説よりは取るべき所多かりき

此の二人譬へば常陸山と国見山か知らず荒岩は果して誰ぞ

ト部唯我、流石は少壮弁護士界の傑物なり所謂鉄中の錚々たる者とこそ謂ふべけれ但だ其説や平、凡、古

当日の会場は何となく殺気を含めりそれかあらぬか討論終結の後藤田某と大塚某との間に紛更を生じたり藤田の言固より理あり大塚恥を忍んで謝す藤田尚ほ聴かず勝心客気の大塚何条以て堪えらる可き忽ち何にを生意気なと堂内すんでの事に鉄拳下らんとす快なるかな（不悉信書屋主人投）